

## 林氏墓地と林述斎・佐藤一斎の墓制

吾 妻 重 二

はじめに

東京都新宿区牛込には江戸時代初期の林羅山（一五八三—一六五七）ら林家代々の墓が今なお保存されている。この「林氏墓地」は貴重な儒式墓として国指定史跡になっており、現在、十一月三日の文化の日前後に一般公開されているのでご存じの向きも多からう。

もっとも、この墓地は「儒式」とはいわれているものの、具体的にどのような構想のもとに造られたのかは従来ほとんど調べられていなかった。しかし、その墓制（墓碑の形や大きさなど）が実は南宋・朱熹の『家礼』によっていることはかつて論じたとおりで、羅山らは忠実な朱子学者たらんとして、思想のみならず儀礼についても朱熹の構想に従おうとしたのであった。<sup>①</sup>この林氏墓地は伊藤仁斎ら伊藤家の墓地（京都府）や水戸藩の常盤・酒門共有墓地（茨城県）、大塚先儒墓地（東京都）などとともに規模の大きな『家礼』式墓地として、日本のみならず中国や朝鮮など東アジアの儒教史においても特色ある史跡として記憶されるべきものである。<sup>②</sup>

ただし、林氏墓地をよく見てみると、林述斎（一七六八—一八四二）以下、江戸時代末期の林家当主の墓制は儒式とはいえ、『家礼』を模範とした羅山たち前期当主のものとは違ふところがある。墓のつくりがなぜそのような違う

のか、かねがね疑問に思っていたが、近年の調査によりその理由が知られたので、ここに述べることにしたい。<sup>(3)</sup>

### 一 林氏墓地について——特に『家礼』との関係

まず、林氏墓地について一瞥しておく。<sup>(4)</sup> 林家の墓地はもとと上野忍岡の羅山の別墅内にあったが、元禄十一年（一六九八）、羅山の孫、すなわち林家第三世鳳岡の時代、牛込に幕府から屋敷地を賜ったため、その西北隅の区画に新たに墓地が営まれた。この時、上野忍岡にあった羅山とその妻荒川亀、林家二世の鷺峰らの墓がここに改葬される。その後、林家の人々は代々ここに葬られることになるわけだが、明治以降になると範圍が整理縮小された結果、現在は面積三百五十八平方メートル、ほぼ二十メートル四方の敷地内に林氏八十一基の墓が所狭しと並んでいる。

これらの墓碑群のうちまず注目されるのが羅山妻の荒川亀の墓であり、明暦二年（一六五六）に没し、『家礼』の方式に沿って埋葬された。その葬儀の記録が子の鷺峰撰『泣血余滴』で、三年後の万治二年（一六五九）京都で出版されている。これを見ると『家礼』の影響の大きさがよくわかるのであって、いま『泣血余滴』の序文を見ると、

昔朱文公遭其母祝孺人之喪、折衷儀礼士喪而制作家礼、後学無不由之。本朝釈教流布闔国、為彼被惑、無知儒礼者。故無貴賤、皆葬事無不倩浮屠。嗚呼、痛哉。近世、有志之人、雖偶注心於家礼、然拘於俗風、而雖欲為之而不能行者亦有之。今余丁母之憂、而其葬悉從儒礼行之。因叙其次序、滴淚以記之如左、取高柴親喪泣血之言而号曰泣血余滴。

（昔朱文公、其の母祝孺人の喪に遭い、『儀礼』の士喪を折衷して『家礼』を制作す。後学、之に由らざる無し。本朝、釈教闔国に流布し、彼の為に惑わされ、儒礼を知る者無し。故に貴賤と無く、皆な葬事、浮屠を倩しとせざる無し。嗚呼、痛ましいかな。近世、志有るの人、偶たま心を『家礼』に注ぐと雖も、然れども俗風に拘

みて、之を為さんと欲すと雖も、行なう能わざる者亦た之れ有り。今、余、母の憂に丁<sup>あ</sup>いて、其の葬<sup>うやまつ</sup>悉く儒礼に従いて之を行なう。因りて其の次序を叙し、滴涙して以て之を記すこと左の如し。

といっている。ここにはかつて朱熹が母の祝氏の葬儀をきつかけとして『儀礼』士喪礼をもとに『家礼』をまとめたこと、その後、後学によってこの書が長く援用されたこと、しかし日本では仏教（浮屠）に惑わされて貴賤を問わず仏式の葬儀が広まった結果、儒礼が忘れられてしまったことなどが述べられている。これを嘆いた鶯峰は母荒川氏をすべて「儒礼」すなわち『家礼』にもとづいて行ない、その式次第の記録を『泣血余滴』として残したというのである。

以後、林家の葬儀はこの『泣血余滴』が定式となり、荒川氏死去の翌年すなわち明暦三年（一六五七）に没した羅山の葬儀、万治四年（一六六一）に没した羅山第四子で鶯峰弟の読耕斎の葬儀、いずれも同書によっている。さらに第二世林鶯峰、第三世林鳳岡、第四世林榴岡、第五世林鳳谷、第六世林鳳潭、第七世林錦峰らの墓碑は大きさ、形とも荒川氏・羅山の場合とはほぼ同じつくりの『家礼』式となっており、また女性の場合もおおむね同じで、早逝した殤子の場合がやや小さいという程度である。

なお、これらはいずれも土葬で、本来は墳土を有していたようである。ただし墳土の形だけは『家礼』式の円墳ではなく、『礼記』檀弓篇上にいう馬鬣封の形式であって、荒川氏・羅山以来の林家の伝統であったが、現在、往年の墳土をそのまま残す墓が一つもないのは残念である。

ともあれ、このように『家礼』およびそれにもとづく『泣血余滴』の記述が林家の基本墓制となったわけで、いまその墓制の代表として荒川氏と林羅山の墓について示しておくことにする。『家礼』式墓碑の特色をふまえ、最初にその型を示し、ついで墓碑正面に刻まれた題字をかぎ括弧つきで掲げる。<sup>6</sup>さらに碑身の寸法（センチ）を高さ×幅×厚さで示す。また跌（台石）については上部（第一段）の高さのみを記した。他に背面などの文字についても紹介し



図1 荒川亀（林羅山妻）墓



図2 林羅山墓

ておく。

○荒川亀（一五九八—一六五六）〈図1〉

尖頭型（タイプB）

「順淑孺人荒川氏龜媼之墓」

碑身 七十八×二十三・五×十五・五

方趺 十三・五（地上部分）

背面に「明暦二年丙申季春 孝子春齋林 恕

立」と刻む

墳土 なし

○林羅山（一五八三—一六五七）〈図2〉

尖頭型（タイプB）

「文敏先生羅山林君之墓」

碑身 七十八×二十三・二×十五・三

方趺 十九

向かって右面から背面、左面へと履歷を刻む

（左行↓右行の順） 文末「明暦三年丁酉三月

中旬 孝子春齋林恕誌／門人坂伯元書」

墳土 なし

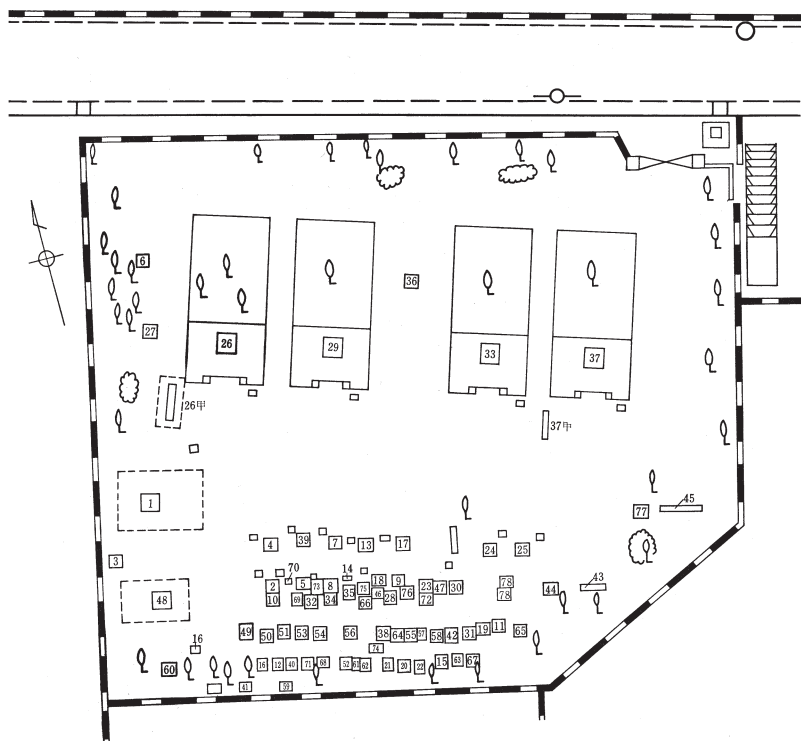
これらの墓はいずれも鷺峰によって造られたもので、墓碑の形状は左右対称で上部をすっきり尖らせた稜角をもつ、いわゆるタイプBの将棋型であり、『家礼』にいう「圭首」をこう解釈したものである。また大きさも『家礼』にいう尺数を羅山・鷺峰なりに計算して定めたものであって、日本の『家礼』式墓碑における尖頭型の典型を示している。ちなみに碑身に刻まれる「順淑孺人」および「文敏先生」は私諡、「春斎林恕」は鷺峰のことで、「春斎」はその別号、「恕」は名である。

この墓制は以後、林氏歴代の墓はもちろん、林家の権威とあいまって江戸時代における日本の『家礼』式儒墓のモデルになった。日本には他にも『家礼』式儒墓は少なくなく、林家の墓制の影響はかなり広範に見出すことができるのである。

もう一つ重要なのは、この墓制が中国や朝鮮にはない日本独特のもので、同じく『家礼』の影響を受けた東アジアの国々の中でも独自の形式をもっているということである。特に『家礼』にいう「圭首」をこのような尖頭型（将棋型）と解釈するのは、筆者の知る限り、中国にも朝鮮にもない形式であって、日本の儒式墓の特異なつくりになっていると思われる。

## 二 林述斎らの墓制

このように、林家の墓制はひとまず『家礼』と『泣血余滴』によって定められたわけだが、林家を再興した第八世林述斎以下、十一世林復斎に至る四人の墓のつくりはこれとは違うところがある。すなわち切石で各墓所を仕切り、石畳を敷くなど規模が比較的大きく、また墳土の上に樹木が植えられている点も目を引く。すなわち次の四基がそうである（図3）。



林氏墓地見取図

図3 林氏墓地見取図

(新宿区教育委員会『国史跡 林氏墓地調査報告書』8頁)  
左端の[1]が林羅山墓、左下の[2]が荒川亀墓。上に[26]  
林述斎墓、[29]林樾宇墓、[33]林壮軒墓、[37]林復斎墓の四  
基が大きな区画をもって並んでいる。26甲は述斎墓表。





図4 林述斎墓

第八世 林述斎（一七六八—一八四一）  
 第九世 林樾宇（一七九三—一八四七） 述斎三男  
 第十世 林壮軒（一八二八—一八五三） 樾宇三男  
 第十一世 林復斎（一八〇一—一八五九） 述斎六男  
 これら四基の墓制はほぼ等しいので、いま述斎の墓についてのみとり上げて検討する。

○林述斎（一七六八—一八四一）〈図4および図5〉

尖頭型（タイプB）

「快烈先生林府君墓」

碑身 九十六・二×二十七・八×二十四・五

趺 方趺 九（地上部分）

側面・背面に墓碑文なし

墳土 なし 代わりに真上に樹（モクセイ）を植える

切石で墓所の周囲を仕切る 幅二百六十一、奥行五百

二十五

向かって左手前に墓表が立つ 高さ二百三十、幅百二

十七 正面枠内冒頭に「故大内記快烈林公墓表／門

人 佐藤坦謹撰 市河三亥敬書」と題し、ついで



図5 林述斎墓  
墳上にモクセイが大きく茂っている。

正面から裏面にかけて詳細な墓表文を小字で刻む 文末「天保十二年歲次辛丑冬十一月上澣建」

墓碑正面に刻まれる「快烈」は私諡、「府君」は男子の尊称である。また左手前に立つ墓表についていえば、題にいう「大内記」は述斎晩年に幕府から賜わった叙爵である。撰者の「佐藤坦」は佐藤一斎（一七七一―一八五九）で、その『愛日楼全集』卷二十一・墓表にこの文を取る<sup>72</sup>。書丹者の「市河三亥」は書家として幕末の三筆に数えられた市河米庵（一

七七九―一八五八）で、一斎、米庵とも述斎の門人であった。こうした墓表を立てることは『家礼』に記述がなく、功績の大きさを称えるために特に立てられたものであろう。

さて、墓碑の形状は荒川氏、羅山と同じく『家礼』の尖頭型（タイプB）を踏襲しているが、ただし、高さや幅は羅山たちのものよりも一まわり大きく、他の例を探せば江戸初期、中村惕斎の墓碑（九十五・五センチ×二十八・五センチ）にほぼ等しい<sup>8</sup>。中村惕斎は礼学・礼制研究の大家であって、『家礼』にいう「高さ四尺」と「幅一尺以上」を、日本の曲尺ではなく中国の周尺（二十三・一センチ）に即して計算したふしがあり、述斎はこれを参照したかもしれ



ない。ただし厚さは惕斎の墓碑が十九センチなのに対して述斎の場合は二十四・五センチなので、かなり重厚でどしりとした形態となっている。

このように墓碑の形こそ『家礼』の尖頭型であるが、よく見ると述斎らの墓のつくりはそれまでの林家歴代の墓とは異なる特色をもっている。これは述斎および佐藤一斎によって新たな方式の儒墓が考案されたためで、次にそのことを検討してみたい。

### 三 林述斎『封禅書』および佐藤一斎『哀敬編』の墓制

#### 1 『封禅書』および『哀敬編』について

林述斎のこうした墓制はしかるべき根拠をもっており、結論をいえば述斎の遺著『封禅書』および門人佐藤一斎の『哀敬編』にもとづいて造られたものである。これらはいずれも葬祭儀礼につき述べた文献で、写本でのみ伝わった。特に『封禅書』は従来ほとんど知られていなかったが、近年筆者は東京都立中央図書館の河田文庫にそれを見出し、調査することができたので、まずはこれらの文献につき紹介する。

河田文庫は戦前大蔵大臣を務めた河田烈（いさお一八八三—一九六三）の旧蔵書で、佐藤一斎—河田迪斎（佐藤一斎の女婿で養子）—河田貫堂（迪斎長子）—河田烈（貫堂甥）と継承、集積され、佐藤一斎の『愛日楼全集』五十六卷（写本）、一斎自筆の日記『腹曆』二十二冊、一斎手抄の『四庫全書総目』（四庫提要）五冊など、貴重資料を数多く含むコレクションである。<sup>⑩</sup>ちなみに林家第九世林樾宇の墓誌「恭恪先生林府君墓誌」を撰したのは河田迪斎である。

さて、『封禅書』は写本二種が蔵されており、書誌情報は次のとおりである（図6および図7）。本文はすべて和文

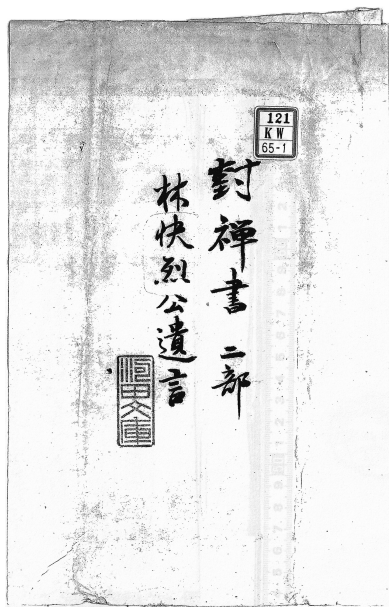


図6 林述斎『封禪書』包み紙

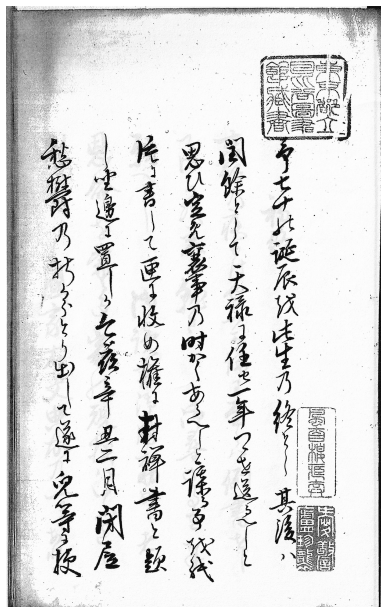


図7 林述斎『封禪書』(1冊目)序

で書かれている。

封禪書 写本二冊(二二一—KW—六五)

和文 和紙の包み紙の表に「封禪書 二部

／林快烈公遺書」と墨筆書付

一冊目 写本 大 大和綴 本文三十三葉

(二二一—KW—六五—一)

卷末識語に

此篇我

述齋先生自記以貽諸後嗣者也

天保十二年辛丑七月十日傳寫 坦記

とあり

二冊目 写本 大 四眼綴 本文二十六葉

(二二一—KW—六五—二)

卷末に一冊目と同じ識語あり、さらに末

尾に

河田興再傳寫

と記す

まず注意されるのは、一冊目の『封禪書』の識語に「此篇は我が述斎先生自ら記して以て諸を後嗣に貽す者なり。天保十二年辛丑七月十日伝写す 坦記す」とあることである。「坦」とは一斎である。この「天保十二年辛丑」（一八四一）というのはまさに述斎が死去した年であって、上記の「故大内記快烈林公墓表」によれば、述斎は同年六月二十一日に一斎を呼んで後事を託し、七月十四日に亡くなっている。ということは、本写本は後事を託された一斎が述斎死去直前の七月十日に述斎手稿本を転写したものであることになる。

二冊目の方は識語末尾に「河田興、再伝写す」とある。「河田興」とは前述した一斎女婿の迪斎であり、一冊目の一斎転写本をのちに迪斎が再度転写したものであるとわかる。

このほか、河田文庫には一斎自筆の『哀敬編』一冊も伝わっている（片仮名交じり文、一二一—KW—一七）。『哀敬編』についてはかつて紹介、影印したことがあり、<sup>(1)</sup>その際は内閣文庫蔵の写本を用いたが、この内閣文庫本は河田文庫の一斎自筆本を写したものであると思われる。

さて、述斎と一斎の二人が親密な師弟関係にあったことは人も知るとおりである。そもそも述斎は美濃岩村藩主松平乗蘊の子で、林家第七世林錦峰が若くして没したため、幕府の命により寛政五年（一七九三）二十六歳で林家の後嗣に入って大学頭に就任し、また昌平坂学問所を設立したのだが、一斎は他ならぬ岩村藩家老の子であり、述斎より四歳下、少年時代からともに学問に励んだ間柄であった。そして述斎が林家を継ぐと改めてその弟子となり、述斎が没すると、今度は昌平坂学問所の儒官として幕府教学を担ったのである。

述斎の葬儀は、このように述斎が信頼を寄せ、その学問を継承した一斎によってとり行なわれた。そのことは、一斎の『言志晩録』別存・第二十八条に、

林家喪祭旧式、沿文公家礼、公嘗疑家礼出於仮託、不欲用之、晚年自述喪式、余亦有哀敬編、經公訂覽。公病已

革、使余幹事、一遵此式、舊式於は一變。

（林家の喪祭の旧式は文公家礼に沿う。公嘗て家礼は仮託に出づと疑いて、之を用うるを欲せず、晩年自ら喪式を述ぶ。余にも亦た哀敬編有りて、公の訂覽を経たり。公、病已に革まるや、余をして事を幹せしむるに、一に此の式に遵う。旧式是に於て一變す。）

とあるとおりである。すなわち、林家の喪祭（葬祭）はかつて『家礼』（文公家礼）によっていたが、「公」すなわち述斎は同書が朱熹に仮託した偽書ではないかと疑ってこれを用いず、晩年にみずから「喪式」の書をまとめた。一方、一斎もまた『哀敬編』を著わして述斎の校閲を得た。そして、述斎は臨終の際、一斎にこの方式に従って葬儀を執行するよう命じた。旧来の林家の方式はここにおいて一変した、というのである。このように、述斎の葬儀は『家礼』に必ずしも準拠せず、独自の礼式によって行なわれた。かつて論じたように、彼らは乾隆六十年（一七九五）刊行の『四庫全書総目』（四庫提要）が採用した『家礼』仮託説をいち早く知っており、そうした当時の中国の新たな学術情報によって『家礼』を採用せず、中国の古礼等にもとづく独自の礼制を構想したのであった。<sup>13</sup>

これに関して注意されるのは、河田文庫に蔵する『言志晩録』稿本（いわゆる晩稿本）であって、右条の中間部分を、

晩年自述喪式、題曰封禪書、不使子弟觀之。余亦有哀敬編、公訂覽之、公病已革、使余幹事、一遵二書。<sup>14</sup>

（晩年自ら喪式を述ぶ。題して封禪書と曰い、子弟をして之を觀せしめず。余にも亦た哀敬編有りて、公之を訂覽す。公、病已に革まるや、余をして事を幹し、一えに二書に遵わしむ。）

として載せている。これによれば、述斎が晩年にまとめたという「喪式」は『封禪書』と題されたこと、これを子弟には見せなかったこと、臨終の際、一斎に葬事を託するのに『封禪書』と一斎の『哀敬編』に遵わせたことなどが明

記されているのである。

この『封禪書』という書名だが、普通「封禪」とは中国の皇帝が天命を受けて帝位に就いた際などに泰山で天地を祀る大規模な祭祀をいい、『史記』封禪書が秦の始皇帝らの封禪の記録であることはよく知られている。そのためこの書名は一見奇妙に映るのであるが、上述したように、述斎はこれの子弟には見せなかつたといい、また「禪」には譲る、授けるの意味があるから、「封印して授ける」という意味でこの名をつけたものと思われる。

『封禪書』の序文には次のようにある。<sup>15)</sup>いま句読点と読みがなを適宜付して翻刻する。

予七十の誕辰を此生の終とし、其後ハ

閏餘として天祿に任せ、一年づ、を送るべしと

思ひ定め、襄事の時かくあるべしと謀る事を紙

片に書して匣に収め、権に封禪書と題

し坐邊に置しが、今茲辛丑二月、閉居

愁鬱の折から、とり出して遂に兎等に授

け従事せしめん為次第を分ち、又新に

思ひよる事をも併せ記して、危篤に臨み

遺囑せずして事足るべきやうに豫め

傳へおくものなり。

すなわち本書はもともと七十歳の作で、みずからの「襄事」（葬儀）のために用意しておいたが、「辛丑」の年二月になって次第を分かち、新たに考えた事などを併せ記したという。つまり七十歳の天保八年（一八三七）に作られ、

死去する天保十二年（辛丑、一八四一）二月に最終的にまとめられたわけで、これらのことは上述した本書撰述の経緯とよく合致している。

本書の目次は次のとおりである。

初終

斂

設靈座

墓制

私諡

成服

追遠

このうち初終から成服までが葬礼（喪礼）にあたり、追遠が祭礼に相当する。この祭礼部分を読むと、林家が述斎以降どのように祖先祭祀を行っていたかが知られて興味深いのだが、ここでは祭礼に関しては割愛する。

前置きが長くなったが、以上の検討をふまえれば、述斎の墓はその遺著『封禪書』および佐藤一斎『哀敬編』の二書にもとづき、『家礼』とは異なる構想を加えて造られたことが知られるのである。次にそのことを具体的に確認してみよう。

## 2 墓制構想

述斎の墓のつくりに関して最も重要なのは『封禪書』の墓制部分である。以下、その記述の区切りごとに仮の見出



しを立て、また句読点と読みがなを適宜付して解説しておきたい。「」内は割注である。

## ア、墓制の方針について

これ迄<sup>まで</sup>の墳制ハ全く文敏公に准據すと見へたり。

其初ハ家禄千石にも満<sup>み</sup>ざればさもありぬべし。追々に

恩澤を以て増邑し、予に至てつゝに三千石を踰<sup>こ</sup>え

たり。こゝにおゐて改めざれば後の則<sup>の</sup>ともし難く、又喪

祭家の有無に適する理にも違<sup>たが</sup>へり。予木圖<sup>もくず</sup>を造りて

預備とす。敢てみづから僭越<sup>たが</sup>して崇大にするに非ず、

子孫よろしく此旨を領すべきなり〔其形制<sup>つ</sup>尽しがたければ前に圖記あり〕。

述齋によれば、従来の墓制は「文敏公」すなわち羅山の方式に準拠してきた。当初千石にも満たない俸禄の時代はそれでもよかったが、家禄は今や三千石を越えた。よってそれにふさわしい形制を整えなければならず、それは僭越には当たらないという。ここにいう家禄については、一齋の「故大内記快烈林公墓表」にも、

家秩原千五百石、至公前後増秩為三千五百石、歳給合一千二百金、其他 恩齋不貲、特旨進班、亜本城留守。蓋自公之入繼、班秩迺出於家祖數世之上、稱曰中興、猶歎也。

（家秩<sup>も</sup>原と千五百石、公に至りて前後秩を増して三千五百石と為り、歳給合して一千二百金。其の他恩齋<sup>おんせい</sup>賢<sup>いは</sup>られず、特旨もて班を進め、本城留守に<sup>つ</sup>亘ぐ。蓋し公の入りて継ぎしより、班秩<sup>はる</sup>迺かに家祖數世の上に出<sup>い</sup>づ。稱して中興と曰うも、猶お<sup>あ</sup>歎<sup>きた</sup>りんや。）

といわれている。俸禄が増えたのはもちろん、身分も小性組番頭次席格に出世し、林家の「中興」という表現では足

りない大きな功績を残したと特筆されている。そもそも『家礼』は一般の士庶のために編まれた儀礼書であるから礼制の記述は質素であり、そのため羅山の墓もかなりこじんまりとしたものであった。述斎の墓が羅山らの墓と違う大きな規模を有しているのは、幕府の上級旗本としての地位にふさわしい規模と風格を持つ墓制が目指されたからなのである。

なお、『封禪書』で「木図」<sup>もくず</sup>を造ったといっているのは、木製の立体模型図を作ったものと思われる。またその説明として別に「図記」を書いたとされるが、残念ながらこれらはいずれも伝わっていないようである。

### イ、規模の大小について

此度<sup>さため</sup>定る制ハ代々家督之者に限るべし。又長子二而

叙爵せば同じかるべし。其餘ハ長子といへども滅殺<sup>げんさい</sup>すべし。

これによれば、今回定めた墓制は家督相続者や長子の叙爵者にのみ該当するもので、それ以外は長子であっても規模を縮小すべきだという。実際、述斎以後、述斎と同じ規模をもつ墓は、上述したとおり林檎宇、林壮軒、林復斎の家督相続者だけであって、他はみなそれよりも小型になっている。

### ウ、墳上の樹について

墳上樹を植べし。予ハ巖桂にすべしと心に期す。

婦女は檜などしかるべし。旧制鬘封の上に麥門冬を栽<sup>うゑ</sup>たり。是ハ大夫は藥草と云語<sup>うご</sup>に泥めるなるべし。今の世に墳樹の定制も無きに強<sup>し</sup>て唐

制を私に假用する事不當ならずや。<sup>わたくし</sup>

予曾て京師惺公の墓に榊一株うへしを甚だ敬服して、多年榊苗を試に培養せしが、土宜にあらず、因て絶念して桂に換<sup>かへ</sup>る事にぞ。



図8 藤原惺窩墓

ここでは墳土の上に樹木を植えることが述べられている。述斎は岩桂（巖桂）がよいと心に決めており、婦女の場合は林檎などでもよいという。また林氏墓地の旧制では馬鬣封の墳土の上に「麦門冬」を植えていたという。麦門冬（ばくもんどう）はクサスギカヅラ科のジャノヒゲの異名で、その根は漢方薬として用いられる。<sup>(16)</sup>ここで「大夫は薬草と云語に泥めるなるべし」というのは『周礼』春官・冢人の賈公彦疏引『春秋緯』の記述に、大夫身分の者は墳土に薬草を植えるのであるの<sup>(17)</sup>によるのだが、述斎は、墓樹についてはきまった制度がない以上、そのような中国のやり方に従う必要はないといっている。さらに、かつて「京師惺公の墓」すなわち京都の藤原惺窩の墓に榊一株が植えられているのに敬服し、長年榊の苗を育てていたが、土壌に合わなかったためそれは断念して岩桂を植えることにしたという。

ちなみに、ここで触れられた藤原惺窩の墓は京都市上京区相国寺の舊林光院内にある(図8<sup>18)</sup>)。現在の墓碑は明治二十一年(一八八八)に新たに立てられたもので、周囲は整備されて往時の面目とはなかり違うようだが、林羅山撰「惺窩先生行状」によると「葬先生于萬年山相國寺某院某地某林、疊石而封樹之<sup>19)</sup>」とあり、また一九二二年刊の寺田貞次『京都名家墳墓録』の「藤原惺窩墓」に「一株の榲櫨樹前に在り〔近年枯る<sup>20)</sup>〕」といっていることからすると、もとは確かに榲の木が植えられていたらしい。

この、墓に植樹するというのは『家礼』にはない話で、述斎は惺窩の墓の例などを参照しつつ独自の判断でそのようにしたわけである。墓地における植樹は中国でも日本でも古くからある習慣だが、しかし大きな墳丘の上とか墳墓の囲りに植樹するならともかく、個人の小さな墳土の真上に樹を植えるというのはかなり特異な発想で、これだと樹木の根が張って地中の棺(遺体)を包み込むようになってしまふであろう。実際、図5に見るとおり、述斎の墳土の上には樹木が大きく茂り、深く根を張っている。

この樹はモクセイらしく、筆者が訪れた十一月三日には橙色の花が咲き残っていた。実は、モクセイは先の『封禪書』で述斎がいつていた「岩桂」にはかならないようである。漢語の「岩桂」について少し調べてみると、高明乾主編『植物古漢名図考』に次のようにある(傍点は引用者による)。

【榲】木犀(木犀科) *Osmanthus fragrans* Lour. 木犀又稱桂、木樨、巖桂、木樨花、九里香等。《花鏡》卷三：「桂、一名榲、一名木樨、一名巖桂。……常見的有金桂或稱丹桂(花橙黃色)、銀桂(花黃白色)和四季桂等。<sup>21)</sup>

ここで植物の種類の細かな同定をしてもあまり意味はないであろう。要は、漢語でいう「岩桂」(巖桂)が、いわゆるモクセイ(木犀)にあたることが確認されればいいのである。つまりは、述斎がみずからの墓に植えたいといっていた「岩桂」が、今、実際に植えられて繁っているわけであって、たいへん興味深い。もちろん、述斎の没後す

に百八十年あまり経っているから、樹齢から見ても今のモクセイは当初のものとは考えにくい、植え替えられた際に同じモクセイが植樹されたものと考えてよいであろう。これは偶然の一致とは思われず、述斎の墓樹構想が今も継承されて残っていると見なければなるまい。

ちなみに中村惕斎は、棺椁が堅固であれば木の根が刺し入る心配はないから、墓の傍や後ろに松柏数株を植えるのもよいという。その根が墓上で交結すれば盗掘防止の役割も果たすだろうといっており（『慎終疏節通考』巻四、樹）、墓樹に関してはその影響があるかもしれない。

## エ、石欄・墳土・植樹について

墓を修めずといふ事ハ最堅実なる地に限るべし。

牛隴旧制の鬘封ハ毎冬凍込に崩れ

年久く経シハ其形を存せず。時俗ハ碑下に

棺を瘞<sup>うすむ</sup>る事とのミ思ふまゝ、鬘封の壊廢し

たる所を敬する事をしらずして、下人等踐過<sup>ふみよぎ</sup>る

弊ありき。因て墳趾に石を盈て其上に土を

盛り樹を植る事とせるなり。

ここで述斎は、墓を修復せずに放置しておくのはごく堅実な土地の場合だけだといひ、普通は必ず保守作業が必要とする。そして「牛隴」すなわち牛込の林氏墓地における馬鬘封は、冬になるたびに凍って崩れ、土盛りがなくなってしまう。ところが人々は習慣上、墓碑の下に棺が埋まっていると思ひ込んでゐるため、崩れた馬鬘封の場所を敬うことを知らず、むやみにその上を踏み歩いてしまう。そこで、墳所に石を敷き詰めて土を盛り、樹を植えること

にしたという。

墓碑の下に棺があると思ひ込むというのは、当時の日本の墓制と関係がある。一般に墓は寺院内に設けられ、土地が狭小なせいで棺の真上に墓碑が立てられるからである。<sup>(23)</sup>こうして日本の場合には墓碑（墓石）がぎっしりと立ち並ぶことになるが、儒式の場合は本来、墓碑が前にあり、その後ろに棺が埋められて墳土が盛られる。しかしそれだと、墳土が無くなって平らになった場合、棺（墳<sup>はかばな</sup>）の上が足で踏みつけられてしまうというのである。述斎の墓は、こうして墳土の周りを切石で囲み、墳上に樹を植えて棺のありかがわかるようになっていた。<sup>(24)</sup>確かに、これなら棺の上が踏みつけられることはあるまい。

これに関して、一斎『哀敬編』には、

碑ノマハリニ石欄或ハ石屏ヲ設ケ、其中ヲ切り、石ニテ甃スヘシ。（『哀敬編』哀編下、立碑<sup>(25)</sup>）

といっている。「甃」は石畳にすること、述斎の墓は実際に墓碑の周囲を切石で仕切って石畳を敷き、墳土——土盛りは現在はなくなくなっているが——すなわち棺（墳）の位置が、一目でわかるように工夫されている。

『家礼』にはないこれらの墓樹や石畳の方式は、その後、林檉宇、林壮軒、林復斎の墓制へと受け継がれるのである。<sup>(26)</sup>なお墓誌についていえば、一斎は述斎のために漢文の「快烈先生墓誌」<sup>(27)</sup>を撰している。『封禪書』に墓誌の記述はないが、『哀敬編』には「刻誌石」の条があつて誌石の制作につき述べているので（哀編上、刻誌石<sup>(28)</sup>）、述斎の誌石は実際に作られた可能性がある。<sup>(29)</sup>このほか、先に触れたように河田興「恭恪先生林府君墓誌」も伝わっている。墓誌は『家礼』においても制作が勧められているので、これについては『家礼』に従ったことになろう。

そもそも林氏墓地には林鳳岡、林榴岡、林鳳谷、林鳳潭、林錦峰ら十四人の墓誌もしくは墓誌蓋が現存していいて、それらは改葬された際に地中から出土したものであるが、<sup>(30)</sup>述斎以下四世の墓は比較的新しく、また切石で囲まれるな



どつくりが堅固であつて、改葬された形跡がない。そうであれば述斎らの誌石は当時のまま、なお彼らの墓前に埋まっていると推測されるのである。

#### おわりに

本稿では林氏墓地につき、それがどのような構想のもとに造られたかを探ったものである。第八世林述斎の以前と以後では、その根拠がそれぞれ違うことが明らかになったであろう。かつて昭和五十三年（一九七八）に出された『国史跡 林氏墓地調査報告書』（新宿区教育委員会）はかなり詳細かつすぐれた報告書であつて、今なお援用されることが多いが、そこに次のようにいうのは訂正が必要と思われる。

林家の人々は儒教の礼式により儒葬されたが、墓地縮少のために、すでにその面影を止めるものは、八世から十一世に至る四代の大学頭の墓のみとなつている。他に儒葬の礼は少く、この四基の墓は貴重な遺例といえるものである。（同書、二頁）

この説明は間違ひではないが、述斎らの四基のみが儒葬の典型例のようにいわれるのは正しくない。より正確に言えば、荒川亀・羅山ら江戸時代後期までの墓は朱熹『家礼』とそれにもとづく『泣血余滴』に従つて造られたが、述斎以下、江戸時代末期の四基は『家礼』を一部ふまえつつも、それとは別に構想された述斎の『封禪書』および佐藤一斎の『哀敬編』にもとづいて造られている。すなわち、述斎以下の林家当主の四基は、規模が大きく、切石で囲まれ、さらに墳上に植樹するなど、羅山以来の「旧制」とは違って、上級旗本としての地位にふさわしい規模と風格を示すように造られているのである。

最後に、墓域内の周囲に植えられている樹木について、述斎の述べるところを紹介しておきたい。『封禪書』の「追

遠」すなわち祭礼部分における記述である。

牛隴もと荒廢せしを修補して深鬱

の境とせしが、己亥の火患にて多く焦灼

しあさまになりしかば、再び木を栽添候に

其夏の早にて多く枯槁せり。後又うへ

添れども猶おもはしからず、追々に補栽して

鬱茂を謀る也。後年参拝ごとに検點して

浅まなる所ハ補植すべし。怠るべからず。

ここに「己亥」というのは天保十年（一八三九）で、述斎の死去する二年前のことである。牛隴（牛込）の当墓域がもと樹木が鬱蒼と茂る区画だったこと、この年の火災や夏の日照りによって多くが枯れてしまったこと、それをみずから修復したこと、そして今後、参拝することに点検して補植すべきことなどが説かれている。現在、墓域は縮小されたとはいえ、なおクロガネモチ等の常緑樹が茂っており、述斎の遺志をそれなりに伝えていることになる。この墓域内における植樹の件もまた林氏墓地の歴史において従来知られていなかった事柄と思われるので、ついでに引用しておく次第である。

注

（一） 吾妻重二「日本における『家礼』の受容——林鷺峰『泣血余滴』『祭奠私儀』を中心に」（吾妻重二・朴元在編『朱子家礼と東アジアの文化交流』所収、汲古書院、二〇一二年）、吾妻重二「日本における『家礼』式儒墓について——東アジア文化交流の視点

から」(一)〔関西大学東西学術研究所紀要〕第五十三輯、二〇二〇年)、松原典明『近世大名葬制の考古学的研究』(雄山閣、二〇二二年)二七八頁以下。

(2) 伊藤家墓地と水戸藩の常盤・酒門共有墓地については吾妻重二「日本における『家礼』式儒墓について——東アジア文化交渉の視点から」(三)〔関西大学東西学術研究所紀要〕第五十五輯、二〇二二年)参照。

(3) 筆者が林氏墓地を調査、撮影したのは二〇一九年十一月三日である。林氏墓地の所在地は東京都新宿区市谷山伏町十六番地。

(4) 林氏墓地の概略については、『国史跡 林氏墓地調査報告書』(新宿区教育委員会、一九七八年)参照。

(5) 『泣血余滴』は吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』一(関西大学出版部、二〇一〇年)に影印した。

(6) 『家礼』式墓碑には円頭型と尖頭型の二つのタイプがあり、筆者は前者をタイプA、後者をタイプBと呼んでいる。このうちタイプAの方が『家礼』の元来の形式と思われる。注(1) 吾妻重二「日本における『家礼』式儒墓について——東アジア文化交渉の視点から」(一)を見られたい。

(7) 荻生茂博編集『愛日楼全集』(近世儒家文集集成第十六巻、ぺりかん社影印、一九九九年)巻二十一、二七五頁。なお、同書巻二十・墓銘三にも類似的の文として「故大内記快烈林公墓銘并序」が載っており、巻二十一所収の「墓表」にはない銘を七句、末尾に付している。ただしその「墓表」の題下に小字で「此表今用此」とあり、実際に述斎墓碑に刻まれているのはこちらの「墓表」なので、「墓銘并序」の方は該文の草稿であつたらう。この墓表はまた注(4)『国史跡 林氏墓地調査報告書』八三頁以下、および鶴田勢湖『舊幕府大學頭林氏墓域』(二)〔墓蹟〕第十三輯、一九二九年)にも翻刻を収める。

(8) 中村惕斎の墓碑については注(2) 吾妻重二「日本における『家礼』式儒墓について——東アジア文化交渉の視点から」(三)で報告してある。

(9) 東京都立日比谷図書館『東京都立日比谷図書館蔵 河田文庫目録』(一九六二年)。「封禪書」については、吾妻重二「佐藤一斎『哀敬編』について——日本陽明学者の新たな儒教葬祭書」(原田正俊編『アジア遊学』二四五、アジアの死と鎮魂・追善、二〇二〇年)で簡単に触れたことがある。

(10) 河田興「恭恪先生林府君墓誌」は、横瀬貞『近世名家碑文集』(経済雑誌社、一八九三年)および亀山聿三編『近代先哲碑文集』第四集(夢硯堂、一九六五年)に収む。

(11) 吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』七(関西大学出版部、二〇一八年)。

- (12) 相良亭ら『佐藤一斎・大塩中斎』（日本思想大系四十六、岩波書店、一九八〇年）一六一頁、二七二頁。
- (13) 一斎らの礼制構想の基本的立場については、注（9）吾妻重二『佐藤一斎『哀敬編』について——日本陽明学者の新たな儒教祭書』で論じた。ただしこの四庫提要の『家礼』仮託説は現在、否定されている。
- (14) 注（12）『佐藤一斎・大塩中斎』三四一頁、補注二八。
- (15) 以下、『封禪書』の引用はその一冊目を主とし、必要に応じて二冊目によって対校した。
- (16) 『広辞苑』第七版（岩波書店、二〇一八年）、また『本草綱目』草部・卷十六「麦門冬」参照。
- (17) 『周礼』春官・家人「家人、掌公墓之地……以爵等爲丘封之度與其樹數」の賈公彦疏に「案春秋緯云、天子墳高三仞、樹以松。諸侯半之、樹以栢。大夫八尺、樹以藥草。士四尺、樹以槐、庶人無墳、樹以楊柳」とある。大夫の墳土の高さは八尺で、藥草を植えるという。
- (18) 筆者が藤原惺窩墓を調査、撮影したのは二〇二〇年二月二十四日である。
- (19) 国民精神文化研究所『藤原惺窩集』卷上（もと一九四一年発行、思文閣出版復刊、一九七八年）一二頁。
- (20) 寺田貞次『京都名家墳墓録』（村田書店、一九三二年）五三頁。
- (21) 高明乾主編『植物古漢名図考』（大象出版社、二〇〇六年）三〇〇頁。
- (22) 吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』四（関西大学出版部、二〇一五年）九二頁下段。
- (23) このことについては、一斎『哀敬編』に「喪礼第一緊要事ハ棺槨ニアリ。……臥制ニテハ墳墓場取りテ僧寺湫隘ノ域ニ容レ難ク、偶コノ制ノ墳墓アレハ後或ハ人ニ蹈マル、患アリ。然レハ瓦棺ニテ坐制ニスルノマサレルニ如カス」（哀編上、治棺槨）といっている。注（11）吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』七、一一五頁以下。
- (24) この点に関して、『哀敬編』は『封禪書』と違っている。『哀敬編』では「今坐棺ヲ葬レハ別ニ墳ヲ起サス、直ニ墳上ニ碑ヲ立テ、碑ニシテ墳ヲ兼ネシムヘシ」というように、坐棺の墓上に墓碑を立て、それを墳土の代わりにすればよいとするからである（『哀敬編』哀編下、立碑）。注（11）吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』七、一三六頁。
- (25) 注（11）吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』七、一三九頁。
- (26) ただ、林檎宇の墓上にはモクセイではなくクロガネモチ（黒鉄鰯）が植えられている。これはおそらく林氏墓地の周りにクロガネモチが植えられていることから、ここにも同じ樹が植えられたものであろう。なお、この樹がクロガネモチであることは、新宿

歴史博物館の芦崎泰彦氏の教示による。

(27) 『愛日樓全集』卷二十二・墓誌。注(7) 近世儒家文集集成第十六卷、二九三頁。

(28) 注(11) 吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』七、一一七頁。

(29) ただし、『哀敬編』では『家礼』のように蓋と底に分けずに一枚の石を用い、さらに表面は仮名交じりで「処某姓名遺骸藏」とだけ記し、裏面に「故某官某氏君名某称某、何年月日生、何年月日卒、壽若干、葬於某郷」と漢文でごく簡単に記すだけとする。「快烈先生墓誌」は五百九十字余りからなる長文なので、それとは違っている。

(30) 注(4) 『国史跡 林氏墓地調査報告書』三頁以下。